大浪池の神秘

霧島の火口湖の謎

大浪池は、霧島連山に点在する数多くの火口湖と同じ秘密をもっています。湖に水を供給する川や細流がないにも関わらず、水位はほぼ年中変わりません。この不思議な現象は一体何が原因で起こるのでしょうか？

大浪池の正体は、目に見えるものだけにとどまりません。湖の水源は地下にあります。クレーターの底面は地下水面の下に位置し、これがクレーターに水を貯めるのです。そしてこの現象が、霧島の水の豊かさを反映しています。

大浪池の紅葉が美しい理由

秋になると、大浪池の植物は、鮮やかな赤と黄色の色調で彩られます。近くの新燃岳や御鉢クレーターではこれが見られませんが、この違いは、異なる地域が発展していった過程での相違点により生まれます。

新燃岳や御鉢クレーターなど、近年火山活動を経験した火山帯においては、草やまばらな森林地しか育ちません。大浪池のように、最後の噴火から長い時間が経過しているところでは生態遷移も進んでおり、そのために多様な植物類が比較的安定して生息できる生態系が発展します。そしてこの多様性の違いが、紅葉に見られる違いを生み出します。

大浪池の周辺で育つ木には、もみの木、ツガ、多様な常緑樹の他に、ブナやナラなどの落葉広葉樹があります。これらの木々は秋になると葉が色変わりしますが、南九州に広く分布していたのは最後の氷

河期の間で、20,000 年前にピークを迎えました。気候が温暖になるにつれて、これらの木々はいたるところから消えました——霧島連山の標高が高い地域を除いて。

他の地域の火山では、比較的最近の火山活動により、古代の広葉樹の系統を引く落葉樹林が生息していた生態群集が破壊されました。大浪池の最後の噴火は 45,000 年ほど前であったため、色の変化する植物も十分に生長し、安定して育つことができます。

火山周辺にある植物の分析は、その起源と歴史について多くを物語ります。霧島連山を探検しながら地域の草や低木、そのほかの木々をよく観察してみましょう。霧島連山の豊かな歴史に触れることができます。